

田中鉄郎

北海道労働者
協同組合

2001～2年にかけての「全国縦断市民発仕事おこしシンポ」のとりくみに共感し、北海道でも01年12月に函館市で開催した。いまこの時期に市民発仕事おこしの運動が重要だという人の声に励まされて、北海道各都市縦断でのシンポ開催にあらためて挑戦している。

まず、4月19日（土）に北海道大学を会場に開かれる「札幌シンポ」が、地味だが盛り上がってきている。主催団体は、NPO推進北海道会議、ワーカーズコレクティブ北海道連絡協議会が加わって9団体となり、NPO代表で北大法学部田口晃教授が実行委員長を引き受けてくれた。市民発仕事おこしのためにはワーカーズコープ法も必要、市民の選択肢は広いほどいい、と法制定運動に注目している研究者である。

プログラムは、ILO駐日代表堀内光子さんの基調講演をかわきりに仕事おこしの9団体が日頃の想いや実践をリレートークする。日本労協連から菅野正純理事長に協同労働と法制化の特別発言をお願いし、最後に実行委員長が全体のまとめを発言されるという流れである。

メイン講演を堀内光子さんに快諾いただけたことで、NPO、ワーコレ、ケアワーカーズ、農村女性起業グループなど推進団体の女性たちからの期待はひときわ大きい。司会は協同総研会員で北星学園大学田渕直子助教授が担当される。

地味だが盛り上がっているとりくみの立て役者と雰囲気伝えたい。

この時期に「函館シンポ型の運動は重要」と最初にとりくみに共感したのは国鉄民営化との闘いから労働者協同組合道南ネットを起こした池田晴男さん（専務理事）である。彼は北海道教育大函館校で社会実践論の講義を受け持つ一人だが、ことし同大卒業生の正式教員合格率が20%台まで下がっていることに心から怒っている。かつて、国鉄から首を切られ多くの労働者が清算事業団に移されたとき、当局から「働かない労働者」というレッテル貼りの中傷宣伝をマスコミ総動員で行われた。労働者の人としての尊厳が否定されたばかりでなく家族まで深く傷ついた。この時、労働者にとってこれ以上の人権侵害はない芯からの怒りとともに、自分は他者の人権にどれだけ関心と関わりをもって生きてきたらうかと考えたという。障害者の作業所に関わり、環境リサイクルを道南ネットの仕事にし、いま市民発仕事おこしの運動を通じてドメスティックバイオレンス、若者の手による街の活性化、元気高齢者づくりなどありとあらゆる市民の活動に加わり、NPO推進道南会議の事務局長も引き受ける。超多忙な日々だが月に何回かは国労中央委員会など国家との争議も

忘れていない。国を相手に闘ってきて、争議の行方は不透明だが、この街のとりくみとそれを
つうじた市民の新しいつながりを最近、「少し勝ってるかな」と感じるようになったという。

この池田さんのつなぎで、NPO推進北海道会議の事務局長佐藤隆さんとシンポの趣旨構想
を話し合った。協同労働の協同組合法について「生協法や企業組合との違い」「できるとどう
なるか」など矢継ぎ早にやりとりがされ、これにも「何ら問題も違和感もない」と主催団体、
実行委員（長）などを承諾してくれた。NPOは全国8500、北海道380団体を数える。
北海道はNPO先進国といわれるが、さまざまな実態があり、いいことばかりではない。雇用
への貢献が期待されて事業型NPOが増えていくだろうが事業の継続、人材の育成という点で
NPO法の問題、限界も感じているという。現在の企画・旅行会社を営む前は17年間全通
（郵便局の組合）で労働運動に情熱を注いだ。96年頃から現在までNPOに関わってきたの
だが、労協については中西五州氏著による本を読んでおり、このころに「協同組合という方法
も考えたことがある」という。NPO推進北海道会議の正式参加はその後のワーカーズコレク
ティブの正式参加、連合北海道、北海道労働金庫等の後援応諾、道庁の後援と出席へとつな
がったと思われる。

高齢協専務の吉田裕さんが、農村女性の起業グループいくつかを訪れ参加を呼びかけてい
る。北海道の「地域」に都市型は少ない。市民発仕事おこしといったとき農業、水産、森林を
忘れることはできない。長野大学田中夏子助教授が農業女性のこの運動が全国に広がりその数
7300団体ほどが活動していることを紹介されている。北海道にも200団体以上あること
がわかった。その一つ、空知地方栗沢町にある手作り味噌のグループが参加する。この地域で
はこうした農村女性の活動が活発で、空知中央農村女性ネットワークは100名を越える集ま
りだという。

実行委員会のレジメづくりなど準備をとり仕切っているのは事務局長のワーカーズコープ札
幌代表の現田友明さん。若い人の発言がほしいと意見が出れば候補をすぐ探し出してくれるの
がワーコレ事務局の喜多洋子さん。研究者の方々からはホームページやメールの呼びかけに応
じて賛同の承諾やあたらな先生方のご紹介がよせられるといったとりくみ方であり、1月、3
月と2回の実行委員会を開いただけで顔を見てする打合せや足を運ぶとりくみは決して多くな
いのだが、徐々に雰囲気は盛りあがっている。

北海道に労協が設立されたのは9年前で来年10年を迎える。新しい福祉社会の創造を掲
げ、高齢協が各都市にひろがり、ヘルパー講座からケアワーカーズコープが各地に生まれ、い
ま地域福祉事業所の新しい質的發展とさらなる新地域への展開をめざす課題に一生懸命だ。と
もあれここまでが第一幕。次のシナリオをみんなでいま考えなければならぬ時期である。一
緒に考えるリーダーもそれなりにいると思う。地域社会が大きく動いている。市民発仕事おこ
しの胎動は21世紀が新しい時代であることを確実に伝えてくれている。札幌シンポを成功さ
せたい想いの出発は、北海道の労協運動の次のシナリオをみんなで考えるための基礎となる共
通認識づくりもあった。シンポは各都市でできるだけ開きたい。この中でどれだけの人と出会
うか、どれだけの考えや感覚と出会えるか、そして、そのとりくみにどれだけの労協組合員が
関われるかで、次のシナリオの高さと内容の豊かさが決まるだろうと思っている。